

剣道における打突時の発声に関する一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡嶋, 恒, 舘林, 啓二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008303

剣道における打突時の発声に関する一考察

岡嶋 恒¹・館林 啓二²

¹北海道教育大学釧路校スポーツ科学研究室

²大船渡市立大船渡中学校

A Study of The Jargon used when Performing Various Attacking Moved in Kendo

Tsuneshi OKAJIMA¹, Keiji TATEBAYASHI²

¹Department of Sports Science, Hokkaido University of Education, Kushiro Campus

²Ofunato Junior High school

要 旨

剣道と薙刀以外の運動競技においては、打突時に打突する部位（メン、コテ、ドウなど）を呼称することはない。剣道の有効打突の条件は「充実した氣勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものとする」であり、打突部位を呼称しなければならないという項目は見当たらない。現在の「打突時における打突部位呼称」が、いつ頃から行われるようになったのか、その経緯についての知見を得ることを目的とした。流派が発生し、特徴ある修行方法や技術を作り上げていく過程において打突・斬突時に発声が行なわれており、そのことが打突部位呼称への発展に大きく関わっていく。

江戸時代初期には、発声が打突・斬突を効果的にする働きがある要素として認識されていたことが推察できる。江戸時代中期には防具の改良が進み、「面」「籠手」と打突部の名称が確認できるが、各流派で打突時の発声や打突部位が統一されていないために打突部位の呼称が浸透しなかったことが推察できる。剣術の技が面、籠手、胴、突きに分かれ、その部位を打突する技の研究が進んでいく江戸時代後期が打突部位呼称の萌芽期と考えられる。直心陰流の榊原健吉は「オメーン、オコテー」と打突部位呼称を行っていた。

明治44年、剣術が中学校の正科教材に加えられることになり、文部省は武術講習会を催した。ここで剣術の指導の内容・方法の統一が図られ、打突時の発声方法や打突部位呼称が示された。打突部位呼称は、簡明適切で自然な発声方法として採用され、剣道指導を効率よく行う手段として定着していった。以後これに沿った形で剣道指導が展開されることになる。昭和27年、「全日本剣道連盟試合規則」が制定され、有効打突の条件に「打突の三要素」が組み込まれ、現在においては有効打突の必要条件として確立されている。

I. はじめに

対人競技である剣道は、打突時に打突する部位（メン、コテ、ドウなど）を呼称することが一般的に行われている。しかし、剣道と薙刀以外の運動競技においては、このような呼称は見られない。全日本剣道連盟の『剣道試合・審判規則、剣道試合・審判細則』⁴¹⁾では、剣道の有効打突の条件を「充実した氣勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものとする」と定義しているものの、必ず打突部位を呼称しなければならないという項目は見当たらない。高野は『剣道』¹⁴⁾で、「懸聲は是れによりて我が勇氣を増し、撃ち込む太刀の勢を加

へ、敵を威嚇し、其舉動を制す。是れにて能く精神を緊張せしめ、心身の勢力を集注し得るものなり。……」と述べている。『幼少年剣道指導要領』⁴²⁾でも、掛け声（発声）について「掛け声とは、心に油断がなく気力が充実した状態が自然に声になって外にあらわれたものである」と説明している。さらに、掛け声の目的として「心気力の一致をはかり、打突を正確にさせる」を挙げており、打突時における掛け声（発声）は打突を有効なものにするための大切な要素と考えることができる。また同書では、掛け声の方法として「打突を加えた部位の名称をメン、コテ、ドウ、ツキという」といった打突部位の呼称が紹介されている。このことから、打突時におけるメン、コテといった打突部位

の呼称は、有効打突の条件である「充実した氣勢」と深い関わりがあると考えられる。しかし一方、堀籠³⁾は「初心者、声を出せといわれてもなかなか声が出ない」と述べており、剣道指導における掛け声（発声）や打突部位呼称の指導上の困難性も見逃せない。

本研究では、剣道に関する文献^{4),6),7),9),10),12),14),18),19),21),31),32)}等により「発声」、「かけ声」に関する内容について探求し、現在の「打突時における打突部位呼称」が、いつ頃から行なわれるようになったのか、その経緯を明らかにするとともに、今後の指導内容や指導方法についての知見を得ることを目的とした。

Ⅱ. 打突時における打突部位呼称の歴史

(1) 江戸時代以前の剣術

剣術の基となる剣を操作する技術が芽生えたのは、反りと鎧のある日本刀が出現した平安時代から鎌倉時代にかけてである。剣術は数々の戦場経験によって工夫・改良されていった。また、剣術の技や稽古方法こそ明らかではないものの、当時は弓術、馬術と共に稽古が行なわれていたとされ、剣術は人々の中に浸透していった。その後剣術は、鎌倉・室町時代を経て工夫・研究され、室町中期には流派が成立するようになる。剣術は、総合武術の一つとしての扱いから槍術、馬術、弓術などと共に独自の形態を為すまでに進歩し、修行の順序・方法、教習課程などが組織立てられていった。中でも柳生新陰流では袋しないを用いた稽古が行なわれていたとされ、この頃に竹刀を用いて行なう現在の剣道の基となる運動形態が生まれたと考えられる。

鉄砲の伝来により戦闘法が大きく変化し、甲冑に身を固めた重装備では鉄砲の的になってしまうため、敏捷に動くことが必要となった。白兵戦においては軽装備、刀剣や槍が最も有効となり、そのため剣術は必要性を増し、大きく進歩することになる。流派が発生し、それぞれが特徴ある修行方法や技術を作り上げていく過程において、流派によっては打突・斬突時に発声が行なわれていた。『剣道五百年史』³¹⁾には、「流によっては、シ、エイ、トーを三声ととももある。その外に、ハウ、トウ、ヤの声を掛くるを習いとするともいい、又時にソレという声を用い、古伝にはエイ、トウ、シ、ハウ、ヤ、ソレの七声のみで他の音声をかくること相伝なしともある」と、打突・斬突時に発声を行っていた事実と、その発声が様々であったことが述べられている。この内容がどの時代を示すものなのか定かではないが、室町中期以降に流派の存在が明らかとされていることから、江戸時代以前にこのような発声が行なわれていたことは十分考えられる。古来より人々は、超自然的な力や英雄の存在を強く意識し、天才的な人物として挙げられる流祖が発声を伴う斬突・打突を行なっていれば、弟子たちは発声を優れた技術と判断し、師に近づくためにそれを真似るなどして、これを学んでいったことは十分に考えられる。そし

て、その技術を伝授する過程を繰り返すことで、次第に発声を伴う斬突・打突が流派に浸透し、発達していったものと考えられる。さらに、打突・斬突時に発声していたことが、その後の打突部位呼称への発展に大きく関わっていたことも予測され、江戸時代以前の剣術が、後の剣道に与えた影響は非常に大きいと思われる。

(2) 江戸時代初期の剣道（初代家康から4代家綱までおよそ80年）

江戸時代初期においては依然戦乱の余波が残っており、1614年に大阪冬の陣、1615年に大阪夏の陣、1637年に島原の乱が起こったことなどから、幕府や諸藩では武備の拡張が重視され、武芸は大いに奨励された。また幕府は施政方針として文武の道を重んじ、武家諸法度などの諸士法度を制定し、剣術が盛んに行なわれる大きな要因となった。

また、幕府の文武奨励は剣術の理論的發展を促し、これまで文字で表現することが困難とされていた技法や心法が成文化されるようになった。これにより優れた武芸者の剣術論が著されるようになった。中でも禅僧沢庵の『不動智神妙録』、柳生宗矩の『兵法家伝書』、宮本武蔵の『五輪書』は数ある伝書の中でも特に秀でており、後の剣術に多大な影響を与えた。特に『五輪書』は、武蔵が実戦により会得した剣術の体系がまとめられており、技法の内容の中には打突・斬突時の発声に関わる事項も記されている。

武蔵は『五輪書』⁸⁾の「三つの声と云う事」という項目の中で「声はいきをいなるによつて、火事などにもかけ、風波にもかけ、声は勢力を見す也」と、剣術で声を発することは気の勢いを増し、力をより強く作用させる働きがあると示しており、打突・斬突時に声を発することは効果的であることを述べている。また、「太刀と一度に大きに声をかくる事なし。若戦の内にかくるは、拍子にのるこゑ、ひくくかくる也」と、打突・斬突時に掛ける声は大きくではなく、下腹部（丹田）のみに圧力をかけながら低く掛けることを教えている。下腹部にのみ圧力をかけながら息を吐くことを「丹田呼吸」というが、丹田呼吸による発声には「腹や脳を活性化させ、心の脳、旧固皮質系が調節され、精神が落ち着いてくる」³⁾といった効果がある。剣道では相手との攻防の中で心が乱れると「力む」、「居付く」といった体が硬直した状態となり、思うような打突ができなくなる。

打突・斬突時に発声することは気持ちを落ち着かせ、余分な力を取り払い、打突・斬突のみに力を集約し、勢いを与えることにつながる。これは武蔵が最も大切な打ちとしている「無念無想の打ち」に大きく関連している。無念無想の打ちとは、「体も打つ体勢をとり、精神も打つことに集中し、手はきわめて自然に、加速をつけて強く打つこと」⁸⁾である。これは有効打突の条件とされる「気・剣・体の一致」とほぼ共通している。江戸時代初期には、発声が打突・斬突を効果的にする働きがある要素として認識されていたことが推察できる。

(3) 江戸時代中期の剣道（5代綱吉から10代家治までおよそ100年）

この時期、剣術は他流試合の禁止の影響を受け、「形」を中心とする約束稽古が主として行なわれた。高野は『日本剣道教範』¹⁸⁾において、竹刀打ち込み稽古が開始される以前の稽古の様子を「往古は素面素籠手で稽古したるをもって、まず面と呼びまたは籠手と呼びて、あらかじめ注意を惹きて打ち込めるものなりという。されば不意に発声なくして撃つを古来聲撃ちと称し、卑怯なる打ち方として武士はこれを擯斥したり」と記している。宝暦年間（1751～1762年）には防具の改良が進み、「以後、竹刀打ち込み稽古方式を採用する流派が続出する」⁴⁰⁾こと、また「面」、「籠手」と打突部位呼称を行う上で必要な打突部の名称が確認できることなどから、江戸中期の頃より打突時の発声が打突部位呼称へと発展していったと推察できる。しないや防具を用いて行う「しない打ち込み稽古」の台頭により、剣術は大きな変化を遂げる。しない打ち込み稽古は、正徳年間（1711～1716年）の頃、直心影流の長沼四郎左衛門が皮竹刀を用い、防具を着装して行ったのが初めとされている。その後、宝暦年間（1751～1764年）に一刀流の中西忠蔵が防具を改良した稽古法を採用したといわれる。この稽古様式は、怪我に対する危険回避を目的とし、様々な工夫、研究の上で誕生したもので、世間の注目を集め、次第に普及していった。

しかし、流派によっては保守的な傾向が強く、伝統に拘り、しない打ち込み稽古に対して批判的な態度をとるものもあった。『剣道五百年史』³¹⁾には、当時における打突時の発声について「ヤー、エーイ、トーは三つの声といって多く用いられた」と記されており、各流派で打突時の発声や打突部位が統一されていないために打突部位の呼称が浸透していなかったと推察できる。また、「時に臨み必死の際は必ず声を発することは出来ぬものだ。そこで学習の際にも声をかけないがよいと説くもある」と打突時に発声することに対して批判的な態度をとる流派も存在したことから打突時の発声とその意識は、各流派により異なっていたことが窺える。因みに、示現流では「チェーイ」、二天流では「トー」の発声が採られていた。

(4) 江戸時代後期の剣道（11代家斎から15代慶喜までおよそ80年）

江戸時代後期は、嘉永6年（1853年）のペリー来航をはじめ、諸外国の船が日本の開国を求めて来航するようになり、時代は動乱期を迎えた。このような情勢の下、幕府、諸藩では武道を奨励し、武士の教育、訓練を強化するなど、心身の鍛錬を重視するようになる。剣術も人間形成の意味合いを強く持つようになり、講武所、藩校、町道場といった施設教育機関が設立され、大いに盛り上がりを見せた。

また、これを契機に武士のみならず、一般庶民も武術の稽古に励むようになり、剣術は支持層の広がりを見せた。特に講武所で行なわれた指導は、現在の剣道と非常に深い

関わりがみられる。

講武所は安政3年（1856年）に築地に開所され、剣術、槍術、砲術の指導科目が重視された。剣術の稽古はしないを用いた試合稽古が中心に行なわれ、異流派の剣士が一同に集い、互いに剣を交えるという意外性もあるなど、開かれた形で行なわれた。中でも紀州田宮流の窪田清音が剣術教師として招かれたことは、打突時の発声が剣術に浸透する過程に大きな影響を与えたと考えられる。

窪田は著書『剣法初学記』³³⁾や『剣法聲詞記』³⁴⁾に剣術の掛け声（発声）に関する事項を細かく記すなど、掛け声に深い見識を持った人物であった。窪田は、「コトバとは、心に思い構えて止めたことを、外に見はすの名にして、コは即ちココロのコ、トはトムル、トメン等のトなれば、心に留め置くとなり。またハは、其の心に止めたる端にして、草木の葉、軒端、山のは等のハと同じく物のはしつかたなり。聲とは、未だ詞と為らざる前にして、心より出づる気の餘りの唯一言に見はるる響きを謂う」³²⁾と、剣術で発する声は、心より現れる気の充実が声の響きとして表されたもので、それはまだ言葉に至っていないものであると述べている。また、「聲は必ず求めてかくるものに非ず。求めざるも、出づるべきときは必ず出づるものなり」³⁴⁾と発声は自らが求めて行わなくとも、気が充実し、心が打突に集中することによって、自然に発せられるとしており、これらは「自然発声」を意味していると推察できる。剣道では、初心者の方打突部位呼称は言葉として鮮明に聞き取ることができ、熟練の方打突部位呼称は個性が表れ、言葉として聞き取り難い。これは初心者の頃より努めて打突部位を呼称してきたことにより、自然発声が会得されたためである。発声に意識をおくことは「止心」につながるため、今日でも自然発声は重視されている、窪田は自然発声を悟り得、それを著書に記していることから、江戸時代末期には打突時の発声はかなり深いところまで研究、理解されていたことが窺える。さらに窪田は、「聲は気を進め威を示すの外、武夫の態度をして佳美の観を為さしむるものなり。然るに濫りなる聲は武夫の態度をも下し、其の心までも卑く且輕躁に見ゆるものなり」³⁴⁾と、掛け声は気の充実を示す他に、品格も表すとしている。このように窪田の存在は打突時における発声の意味、効果を武芸者に詳しく指導し、伝達するうえで多大な影響を与えたものと思われ、その後、打突時の発声が浸透していったと推察できる。

また、江戸時代後期には、しない稽古の普及により、流派間で稽古が盛んに行なわれ、武者修行が再び流行するなど、剣術は大いに盛り上がりを見せた。流派によっては、用具や打突部位が異なっていたが、流派間での工夫・研究により徐々に統一されていった。打突部位が現在の「面」、「籠手」、「胴」、「突」に定まった理由について、中村民雄は著書『剣道辞典』¹¹⁾で「頭部や顔面の急所は、文字通り頭に集約され、面という打突部位に定まっていた。小手は右・左があるが当時は右利きの人が圧倒的に多いことと、

右手が仏教的な聖なる手ということともかかわって、通常の場合は右小手を打突部位に定めたのであろう。また、五臓六腑を蔵する胸・腹部、それを正中線に対する横断面として胴に集約させ、正中線上にある急所は突に集約させていったものと思われる」と述べている。生と死を争う勝負の世界において、相手を一撃で確実に仕留められる急所を狙うことは、最も効率よく勝利を収められる。このことから、相手の急所を斬る方法を日々の稽古で工夫・研究していった結果、打突部位が面、籠手、胴、突に定まり、現在に至ったと考えられる。打突部位が統一されると技の体系が確立されてくる。北辰一刀流の千葉周作は「剣術六十八手」において、竹刀稽古での技の体系を確立した。剣術の技が面、籠手、胴、突きに分かれていることから、その部位を打突する技の研究が進んでいたことが分かる。以上のことから、江戸時代後期が打突部位呼称の萌芽期と考えられる。

(5) 明治・大正の剣道

1) 撃剣興業

明治政府による脱刀令、廃刀令さらに秩禄処分などの思い切った改革により剣術は衰微の一途をたどった。その中、以前講武所の剣術教師を務めた直心陰流の榊原健吉は、「撃剣興行」を考案し、困窮に苦しむかつての武士たちを救済し、剣術の普及によってその再興をはかろうとした。撃剣興行は木戸銭を払えば誰でも自由に観戦できたこと、出場者が旧幕時代の一流の剣客であったことなどから大盛況となり、当時失業に瀕していた剣客を刺激した。しかし、興行の人気は一般民衆の一時的な好奇心によるものにすぎず、興行が各地で相次いで行なわれたことにより、物珍しさは消え失せ、徐々に客足が遠退いていった。撃剣興行はその対策として、剣術の諸動作を大きくし、打突部位呼称に限らず様々な掛け声を出して注目を集めようとしたため、打突時の発声には異様な声飛び交っていたと考えられる。

三橋は『学校剣道』⁷⁾で、「現在まで行われてきた掛け声の悪弊は、明治初期に榊原健吉等によって行われた撃剣興行で掛け声が興行価値を高めるために盛んに行われたその風習が伝えられて来たものと考えられるのである。」と述べており、観客を喜ばせることにねらいを置いた打突時の発声は、これまで多くの武士が研究、会得してきた真意に反していたといえる。

2) 大日本武徳会

明治27～28年(1894～1895年)に日清戦争が勃発すると国内には尚武の気風が高まり、急激に武道振興の必要が唱えられるようになる。明治28年には、平安奠都千百年を記念して国民的団体である「大日本武徳会」が組織され、明治39年には大日本武徳会剣術形、大正元年には大日本帝国剣道形を制定するなど流派の統一にも力を注いだ。

当時の「撃剣」「剣術」を「剣道」と改称した背景には、大日本武徳会の影響が大きかった。流派を統一することは

剣術の指導法やその内容に統一性を与え、剣術の普及、発展に大きく貢献することとなった。大日本武徳会剣術形では、斬突時の発声方法を「(掛声)は(ヤーエー)または(イヤト)(エイ)と発す」と定めていた。剣道の精髓・根本的法則とされる剣道形の斬突動作に掛け声が組み込まれたことは、剣道における打突時の発声の必要性が認められたと推察でき、明治39年以降、打突時の発声が確立されていったと思われる。なお、大正元年(1912年)制定の「大日本帝国剣道形」では、斬突時の発声を「ヤー、トー」と定めており、その後「増補加註」「解説」がなされ、現在実施されている「日本剣道形」においても、その発声方法は受け継がれている。

3) 東京高等師範学校

東京高等師範学校は、武術教員の養成に力を入れたことで知られている。明治41年、高野佐三郎が同校の講師として招かれるが、これは剣道の指導内容・方法の統一、そして打突時の打突部位呼称が人々に浸透する大きな契機となった。

高野は峯岸米蔵、木村敷秀らと共に、新しい「級段制度」を実施し、「東京高等師範流の形(後の「五行の形」)」を完成させた。明治44年(1911年)には中学校の正科教材に剣道が加えられたことを受け、文部省は同年11月6日、東京高等師範学校に全国の中学校撃剣教師を集めて講習会を開き、指導法ならびに教授内容の統一を図った。このとき高野は木村と共に教授法に関する指導を担当しており、その中には掛け声の指導も含まれていた。高野は『剣道』³⁷⁾で、「初心の間は容易に自然なる發聲を爲す能はざるものなれば、勉めて活潑強大なる懸聲を爲し、以て自ら勵まし敵を威壓すべし。面を撃ちたる時は面と呼び籠手を撃ちたる時は籠手と呼ぶべし。其の他之に準ず。此の外必要に應じ簡明適切なる言語を以て力強く發聲すべし」と、初心者に対しては、打突時に打突部位を呼称するように指導するとしている。本来、打突時の発声は自然発声が良いとされているが、最初からそれを初心者に求めることは困難である。

しかし、発声方法を各自の判断に任せれば、言葉の選択や他者と異なる発声方法から生じる恥じらいなど様々な問題が生じるため、方法を統一する必要があったと推察できる。ここで統一した発声方法と「打突部位呼称」が示されたことはその後の発声指導に大きな影響をもたらしたといえる。

剣道の精髓・根本的法則である剣道形の斬突時の発声が「ヤー」、「トー」であるにも関わらず、剣道の打突時の発声方法が打突部位呼称とされた要因としては、打突時の発声は「最も自然にして動作に適應する力のある懸聲ならざるべからず。故らに作爲し、又は無用の多言弄する如きは避く可きなり。」¹⁴⁾と、動作に適した自然な形のものが求められており、打突部位呼称は打突の意志や目的が表れやすく、また、面、籠手、胴といった技の形態を覚えるのに適していたことなどが考えられる。

このように打突部位呼称は剣道が中学校の正科教材に取り入れられた明治44年以後、簡明適切で自然な発声方法として採用され、剣道指導を効率よく行う手段として定着していった。

(6) 昭和の剣道

1) 試合規則の変遷と戦技剣道

昭和2年に制定された「大日本武徳会剣道試合審判規程」⁴⁴⁾の中で、剣道の有効打突の基準は、「撃突は充実セル氣勢ト刃筋ノ正シキ業及ヒ適法ナル姿勢トヲ以テ為シタルヲ有効トス」と規定された。ここで初めて「刃筋ノ正シキ業」、「充実セル氣勢」、「適法ナル姿勢」といった、現行の規則にも用いられている「打突の三要素」が示された。打突時の発声は気の充実の表れであることから、「充実セル氣勢」が規則に組み込まれたことは、打突時における発声が必要不可欠とされたことを意味すると考えられる。この後、武徳会規程は昭和9、14、18年と3回の改正が行なわれるが、三要素の判定基準に変更はみられなかった。昭和6年に満州事変、昭和12年に日中戦争、そして昭和17年に太平洋戦争が勃発するなど戦争が相次ぐ中、国家総動員法が施行されたことにより世は緊迫し、戦争への意識が高まると剣道もその影響を受け、実戦に役立つものへと変化せざるを得ない状況へ追い込まれる。このような剣道を「戦技剣道」と呼び、これまで築き上げられた剣道とは一線を画したものとなった。その具体的な変化として、昭和14年には、「実戦での命の遣り取りは1回限り」³⁷⁾という観点から、これまで行なわれた三本勝負の規定を一本勝負とし、昭和18年には有効打突の条件として「実践的気迫」や「斬突」といった表現が試合規則に組み込まれた。昭和16年、武道が「体錬科」の科目となり正科として実施され、昭和18年「体錬科は心身を鍛練し精神を練磨して剛毅不撓の心身を育成し国防能力の向上に努め献身奉公の実践力を増進するを要旨とす」¹²⁾と規定され、剣道は戦技として確立されていった。

昭和17年の『国民学校体錬科教授要項竝に国民学校体錬科教授要項実施要目』⁹⁾には、体錬科剣道における斬突時の発声について「掛聲ハ斬突部位ノ名稱ヲ呼び元ニ復スルニハ左足ヨリ一歩後進シツ、中段ニ復スルヲ本體トセシムコト」と、打突部位呼称を行うことと記されており、戦時中も打突部位呼称が行われていたことが分かる。しかし、戦技剣道では打突の形や過程を重視することは実戦の場においてはあまり意味がなく、戦局が深まるにつれ、斬突時に打突部位を呼称するこだわりは薄れていった。

2) 戦後の剣道と撓競技

終戦後の武道は、戦時中「軍国主義、超国家主義の思想をもち、精神教育を行った」³⁸⁾などの理由から冷遇され、特に剣道は厳しい措置を受けることになった。昭和20年11月6日付の文部次官通達により学校剣道は全面的に禁止となった。昭和21年、文部省体育局長からの通牒により剣道の組織的活動ができなくなり、昭和22年には文部省令によ

って体錬科武道教員の免許状が無効とされた。さらに昭和24年には「警察における剣道訓練の中止」が通知されるなど、戦後の剣道界はまさに潰滅的打撃を受けたといえる。しかし、このような社会情勢も顧みず、人目を憚りながらも剣道の稽古を行う者やGHQ諜報課のベンジャミン・ハザード中尉のように、アメリカ軍内で剣道の稽古を行う者もみられた。昭和24年、学生剣道連盟出身者が中心となって「東京剣道倶楽部」が誕生し、同年10月30日には第1回全国剣道競技選手権大会が開かれた。このような流れにより、昭和25年3月5日には全日本剣道競技連盟が創立され、剣道に対する考え方を「精神や道徳の養成手段」から「体育スポーツ」に改め、試合、審判規則も一新し、剣道は新たな出発を果たすことになった。しかし、司令部当局は剣道のように武道を名称とする団体は認めないとしたため、その名称を「撓競技」とし、組織も「全日本撓競技連盟」と改称して、ここに新しいスポーツ剣道が誕生した。

撓競技の特徴として、自然発声以外の掛け声を禁止したことで、打突時の発声が行われなかったことが推察できる。

勝敗が「一定の時間内での得点の多少」で決定し、有効打突の基準が当たれば得点というものであったことから打突の質は従来の剣道とは程遠いものとなり、意識は当てることに集中し、気の充実は図られなかったと思われる。従来の剣道では有効打突の条件に「充実した氣勢」が規定され、打突時の発声が重視されていたが、自然発声以外の掛け声が禁止する運びとなった背景には、占領軍当局の関与があったと推察できる。占領軍当局は剣道が行われることで再び日本国民の間に攻撃的精神や必勝の信念、旺盛な気魄が芽生えることを恐れていた。そこで剣道の再開を認めるにあたり、戦時中のような「国のために道徳や精神を養うもの」ではなく、「純正な競技」としての剣道を求めたのである。

事実、「戦地でバンザイ・アタック（斬り込み攻撃）を受けた兵士たちもいて、剣道独特の気合いがそのバンザイ・アタックの連想を誘うところから、掛け声についてはクレイムもないではなかった」²⁾と、掛け声や打突時の発声に対して懸念を持っていた。掛け声や打突時の発声を禁止することは、占領軍当局の懸念を払拭し、剣道の再起をはかるための苦肉の策であったと考えられる。

3) 剣道の復興と発展

昭和27年、「戦後わが国の学校スポーツ教材には、個人対個人形式の競技種目が少なく、体育の一般目標から、そのような教材による学習が要求されているが、戦後新しいスポーツ種目として生まれた撓競技は、その要求にこたえる価値をもつものと考えられる」⁴⁴⁾との理由から、中学校以上の体育教材としての実施が認められた。撓競技が普及する一方で、剣道関係者はあまりにも剣道の本質から離れる撓競技に対して不満を抱いており、いずれは剣道を再開したいという希望をもっていた。昭和27年8月17日、日光において全日本剣道連盟設立協議会が開催され、同年9月20

日には東京都剣道連盟会長木村篤太郎、近畿剣道連盟会長代理大谷一雄の連名で、全日本剣道連盟結成の招待状が各都道府県に送られた。そして同年10月13日、全日本剣道連盟結成協議会が開かれ、翌日14日、「全日本剣道連盟」（以下全剣連）が結成された。全剣連は剣道の社会体育における制限枠を外すと共に、剣道を学校体育の教材に取り入れてもらうことを当面の目標に掲げ、文部省と折衝を繰り返した。そして、社会体育における剣道の復活に当たり、保健体育審議会より4つの条件が課せられた。

『三十年史』⁴⁴⁾では、

- 一、スポーツの一種としての性格を明らかにすること。
- 二、学生、生徒の心身教育にふさわしい競技方法と内容を考えること。
- 三、青少年間に広く普及すること。
- 四、全日本剣道連盟がスポーツ団体として組織され、民主的に運営されること。

とその内容が記されている。これを受け、全剣連は試合・審判規則をこの方針に沿った形で定めた。昭和28年5月19日、全国都道府県教育委員会に対し「社会体育としての剣道取り扱いについて」の文部省社会教育長通知が出され、7年間におよんだ剣道制限措置は撤廃された。一方、学校体育の教材化を目指す動きは昭和28年4月、文部省により学校剣道研究会が設けられ、「剣道は武道としてではなく、体育スポーツとして、他の体育スポーツと同等の立場において学生生徒の心身の発達に寄与し、豊かな人間性を作り上げることを目標とする。」⁴⁴⁾との一貫した基本理念の下、新しい剣道のあり方についての検討、研究が進められた。その結果、昭和28年7月には高等学校および大学で剣道が実施できることになった。さらに、昭和32年5月、中学校においても剣道が正科として採用され、撓競技と剣道を整理統合し、「学校剣道」として実施できることになった。ここで試合規則に目を向けると、戦後の剣道では主に大日本武徳会の剣道試合審判規則が用いられていた。剣道が復活するにあたり、スポーツとしての性格が重視されたことから、昭和27年、新たに「全日本剣道連盟試合規則」が制定された。具体的には、

- 一、試合場の広さを定め、一定の区域の中で試合を行うこととし、区域外に出たときは反則として罰則を適用した。
- 二、用具、特に竹刀の長さ、重さを定め、年齢に応じて一定条件の下に試合を行うことにした。
- 三、試合時間を定め、時間内に勝負が決しないときは延長または引き分け制度を設けた。
- 四、試合運行上不適當あるいは不都合と認められる行為を禁止事項として定め、これに違反したときは反則として罰則を適用することとした。
- 五、審判員を複数にし、その任務および要領を定めた。
- 六、異議申立の事項を設けた。

以上『剣道三十年史』⁴⁴⁾など、武徳会の試合規定には見られなかった新しい試みが

為されている。しかし、スポーツとして再出発を果たした剣道は、目覚ましい発展を示す一方で、「なりふりを構わず勝ちを求める技が展開され、剣道らしさを失い、剣道の特徴が不鮮明になり、それがスポーツという名で正当化されるようになった」³⁹⁾というように勝利主義に走る傾向が強まっていった。昭和46年2月、全剣連は剣道技術委員会を設け、試合・審判規則の改正に踏み切った。昭和50年5月には、「剣道の理念」、「剣道修練の心構え」が制定され、その趣意を実現すべく同委員会で約2年間に及ぶ研究討議を行い、昭和54年4月1日、新たな試合・審判規則が施行となった。

表1は戦後用いられた試合規則の有効打突に関する項目の変遷をまとめたものである。

表1 試合規則における有効打突の基準の変遷

昭和2年5月改訂 大日本武徳会 剣道試合審判規則
第5條
撃突ハ充實セル氣勢と刃筋正シキ業及び適法ナル姿勢ヲ以テ爲シタルヲ有効トス。
昭和28年3月1日施行 全日本剣道連盟試合規定
八、有効な打突
充実した氣勢、刃筋正しい技、適法な姿勢とを以て加えた撃突。
昭和54年4月1日施行 全日本剣道連盟試合規則
第17條
有効打突は、充実した氣勢・適法な姿勢をもって竹刀の打突部で打突部位を正確に打突したものとす。
平成11年4月1日施行 全日本剣道連盟試合規則
第12條
有効打突は充実した氣勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものとする。

戦前、昭和2年以降、剣道の有効打突の条件には「打突の三要素」が必ず組み込まれており、「充実した氣勢」が示されていることから、戦後復活した剣道においても打突時の発声は重視されていた。また、戦後復活した剣道は、戦前の剣道が基盤となっており、明治44年に文部省や東京高等師範学校により、剣道の指導内容・方法の統一が図られて以来、打突部位呼称が一般的に行われるようになったことから、戦後においても打突時の発声法として打突部位呼称が行われたと考えられる。昭和29年発行の『学校剣道』⁷⁾では、「打突した場合の1回だけの部位主張の掛声は剣道を活気づける助けにもなり、特に初歩の間はこれによつて元気を出し切つて打ち込んで行く助けにもなつて効果的の面もあるように考えられる。」と、打突部位呼称が奨励されており、平成3年発行の『学校剣道の指導』³⁰⁾でも「昔から、掛け声には三つの教えがある。一つ、打突の前の声で、自分を励まし、相手を威圧する声である。二つ、打突の時の声で技に鋭さと威力を与える。三つ、勝ち名乗りをあげ、

相手の反撃に備えるなどである。実際には、鋭い発声を腹の底から打突部位（面・小手・胴・突）の名称を大きな声で行わせることである。」と、初心者指導において打突部位呼称を行うように示されている。このように、打突部位呼称は一般化し、現在においては有効打突の必要条件として確立されるようになった。

Ⅲ. まとめ

室町中期には剣術の流派が成立するようになる。各流派で稽古方法や打突部位が異なっていたが、それぞれが特徴ある修行方法や技術を作り上げていった。流派によってはその過程で次第に発声を伴う斬突・打突が浸透していったと思われる。

江戸時代初期、武芸は大いに奨励された。幕府は施政方針として文武の道を重んじ、剣術が盛んに行なわれる大きな要因となった。武蔵は『五輪書』の「三つの声と云う事」の中で、打突・斬突時に声を発することは効果的であることを述べている。江戸時代初期には、発声が打突・斬突を効果的にする働きがある要素として認識されていたことが推察できる。江戸時代中期、幕府が「他流試合の禁止」を実施したこと、形を中心とする約束稽古が主流となった。そのため流派間での剣術の研究が行われなくなり、稽古方法や打突部位、防具の統一も進展しなかった。『剣道五百年史』には、当時における打突時の発声について「ヤー、エーイ、トーは三つの声といって多く用いられた」と記されており、各流派で打突時の発声や打突部位が統一されていないために打突部位の呼称が浸透していなかったことが窺える。その後、宝暦年間（1751～1762年）には防具の改良が進み、「以後、竹刀打ち込み稽古方式を採用する流派が続出する」⁴⁰ こと、また「面」、「籠手」と打突部位呼称を行う上で必要な打突部の名称が確認できることなどから、徐々に打突時の発声が打突部位呼称へと発展していったと推察できる。しかし、流派によっては修行方法や内容が異なることから、しない打ち込み稽古の意義についての賛否が分かれた。江戸時代後期に入り、天保年間（1830～1844年）には現在の防具に極めて近いものが完成し、北辰一刀流千葉周作の『剣術六十八手』に見られるように打突部位が定まり、技の体系が確立されるようになった。安政3年（1856年）講武所が開設されると、異流派の剣士が一同に集い、稽古が行なわれるなど、剣術は統一の方向へと進んだ。

紀州田宮流の窪田清音は、著書『剣法初学記』や『剣法聲詞記』に掛け声（発声）に関する事項を細かく記し、剣術の打突時の発声を浸透させる上で大きな影響を与えた人物であった。さらに窪田は、掛け声は気の充実の他に、品格をも表すとして打突時における発声の意味、効果を詳しく指導、伝達したことが窺えた。このことから、江戸時代末期には打突時の発声についての研究、理解がされていた

と思われる。

その後、打突部位呼称が浸透した最大の要因は、明治44年の文部省主催の撃剣講習会、並びに東京高等師範学校の指導者講習であったと考えられる。剣術が中学校の正科教材に加えられたことを受け、剣術の普及のためには指導内容・方法の統一は不可欠なものであった。打突時の発声方法も「初心の間は容易に自然なる發聲を爲す能はざるものなれば、勉めて活潑強大なる懸聲を爲し、以て自ら勵まし敵を威壓すべし。面を撃ちたる時は面と呼び籠手を撃ちたる時は籠手と呼ぶべし。其の他に之に準ず。此の外必要に應じ簡明適切なる言語を以て力強く發聲すべし」¹⁴⁾と打突部位呼称が示され、以後これに沿った形で剣術指導が展開されることになった。

さらに、昭和2年には「大日本帝国剣道試合審判規則」が制定され、有効打突の条件が「撃突は充実セル氣勢ト刃筋ノ正シキ業及ヒ適法ナル姿勢トヲ以テ為シタルヲ有効トス」と規定された。現行規則の「打突の三要素」がここで初めて示され、「充実セル氣勢」が組み込まれたことから、気の充実の表れとされる打突時の発声（打突部位呼称）は必要不可欠なものになった。

戦時中、剣道は「戦技剣道」と称され、国民の道徳や精神を養う手段とされた。これが主な原因となり、戦後剣道は連合軍当局による厳しい措置を受け、学校教育や社会体育の場から姿を消すなど潰滅的な打撃を受けた。剣道復活の足掛かりとして作り出された撓競技は占領軍当局の関与があり、「自然発声以外の掛け声を禁止する」など従来の剣道とは程遠いものであり、打突部位呼称は一時、影を潜める形となった。

昭和27年10月14日、「全日本剣道連盟」が結成され、「全日本剣道連盟試合規則」が制定され、体育スポーツとしての剣道の姿勢を打ち出す一方、有効打突の条件に「打突の三要素」が組み込まれ、撓競技において禁止とされていた打突時の発声も再び行われるようになり、以後打突部位の呼称が復活し、現在においては有効打突の必要条件として確立されている。今後は、他の運動競技にはみられない剣道特有の打突部位呼称がもつ、心身に与える効果やその必要性について検討していきたい。

文 献

- 1) 月刊剣道時代：「有効打突を見極める」，体育とスポーツ出版社，2001. 8，pp.52～53.
- 2) 月刊剣道日本：「戦後剣道の命脈」，スキージャーナル社，1982. 6，pp.28～47.
- 3) 堀籠敬蔵：「剣道の法則」，体育とスポーツ出版社，2002.
- 4) 井上正孝：「剣道講和、正眼の文化」，講談社，1971.
- 5) 加藤寛・西村諒：「武道のことば語源辞典」，東京堂出版，pp.56～57，1995.
- 6) 加藤咄堂：近代剣道名著大系6「剣客禅話」，同朋出版，

- 1986.
- 7) 三橋秀三：「学校剣道」，新体育社，1954.
- 8) 宮本武蔵・神子侃訳：「五輪書」，徳間文庫，2002.
- 9) 「国民学校体錬科竝に国民学校体錬科教授要項実施細目」：文部省，p.186，1942.
- 10) 中林信二：「武道のすすめ」，島津書房，1980.
- 11) 中村民雄：「剣道辞典」－技術と文化の歴史－，島津書房，1997.
- 12) 庄子宗光：「剣道百年」，時事通信社，1970.
- 13) 鈴木政男：「学校剣道」，逍遙書院，1969.
- 14) 高野佐三郎：「剣道」，pp.157～160，1939.
- 15) 同上，pp.236～255.
- 16) 同上，pp.299～313.
- 17) 同上，pp.331～371.
- 18) 高野佐三郎：「日本剣道教範」，同朋出版，1986.
- 19) 高野佐三郎：「剣道教本(上)・(下)」，島津書房，pp.49～50，1991.
- 20) 同上，pp.112～113.
- 21) 高野弘正・佐藤卯吉：「最新剣道教範・1巻」，東京開成館，pp.73～77，1930.
- 22) 高野弘正・佐藤卯吉：「最新剣道教範・2巻」，東京開成館，pp.48～56，1930.
- 23) 高野弘正・佐藤卯吉：「最新剣道教範・3巻」，東京開成館，pp.24～26，1930.
- 24) 同上，pp.31～33.
- 25) 同上，pp.59～66.
- 26) 同上，pp.108～110.
- 27) 同上，pp.126～129.
- 28) 同上，pp.134～135.
- 29) 同上，pp.149～154.
- 30) 田島行夫・廣橋義敬：「学校剣道の指導」，健帛社，p.117，1991.
- 31) 富永堅吾：「剣道五百年史」，百泉書房，1972.
- 32) 山田次郎吉：「剣道集義」，一橋剣友会，1968.
- 33) 同上，p.95.
- 34) 同上，pp.212～222.
- 35) 全国教育系大学剣道連盟編：「ゼミナール現代剣道」，窓社，1992.
- 36) 同上，pp.64～72.
- 37) 同上，pp.73～82.
- 38) 同上，pp.83～91.
- 39) 同上，pp.92～101.
- 40) 同上，pp.267～273.
- 41) 財団法人全日本剣道連盟編：「剣道試合・審判規則、剣道試合・審判細則」，全日本剣道連盟，1999.
- 42) 財団法人全日本剣道連盟編：「幼少年剣道指導要領」改訂版，全日本剣道連盟，2001.
- 43) 財団法人全日本剣道連盟編：「剣道医学Q & A」，全日本剣道連盟，pp.10～13，2001.
- 44) 財団法人全日本剣道連盟編：「三十年史」，全日本剣道連盟，pp.18～40，1982.
- 45) 同上，pp.58～72.